

附加条では附加条を軸の縄と同方向に絡げた第1種が約20%、附加条を軸の縄と反対方向に絡げた第2種が約45%、附加条を軸の縄に右巻きし、左巻きしている第3種が約1%、軸の縄は不明であるが附加条と判断されるものは約34%となる（第67図下段）。軸の縄に絡げた附加条は1本から4本まで確認できる。統計処理は行わなかったが、2本用いたものが最も多いと思われる。種別で最も多い第2種では、附加条に繊細な縄を用い幅のある軸の縄を地にして対比的な効果を醸出した例（図版34-8）や、附加条を3～4本用いたり太い2本を用いたりして附加条に幅を持たせ、軸の縄の条を分断させることで、関山式で盛んに用いられた直前段合撫の擬似的効果をもたらした例（図版35-1）がある。このように第2種は他の附加条に比べより施文効果が高いことから、盛んに用いられた可能性がある。

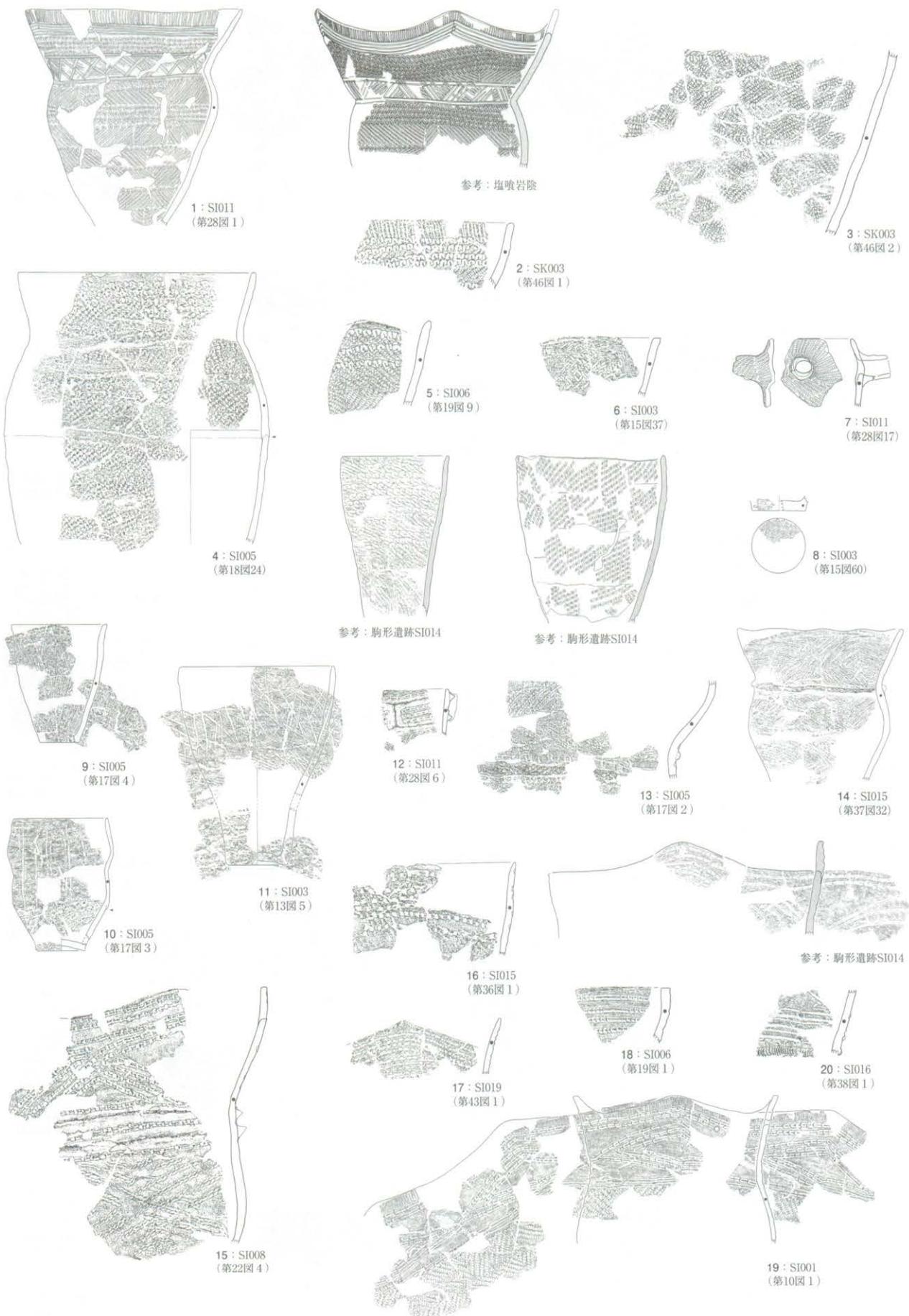
軸の縄は不明だが附加条縄文と判断したものは全体の約1/3ある⁵⁾。規則的に条間の空いた回転圧痕の多くを撫糸文とせず附加条縄文と考えた理由は、駒形遺跡の報告で既述しておいた⁶⁾。要点を再度述べれば、2条以上が組になり規則的な間隔をおいて施文されている場合、軸に棒状工具を用いた撫糸文より軸の縄に撫紐を絡げた附加条の方がより軸に絡みつくので、2条以上があまり緩むことなく安定して表出される可能性が高いと、土器の観察結果及び製作原体の施文実験から判断できたためである。また、第1種・第2種に識別されたものの中にも附加条が軸の縄より突出するためか、部分的に軸の縄が付いていない或いは付きにくくなっているものが実際認められることから、この考えは補強されよう。今回はこれらの理由に加え、施文単位方向に対して条間の空いた回転圧痕が斜位にあるものを附加条縄文（図版35-3・4）、同一方向にあるものを撫糸文（図版35-5）と判別した。今まで撫糸文とされた事例中には、軸の縄が不明である附加条縄文が相当数含まれていると考える。

原体の素材は一般的には細かく裂かれた比較的軟らかな纖維をよく撫り合わせているが、中には樹皮など硬い纖維を用いよく撫り合わせていないものがあると指摘されている（山内1979）。素材は不明であるが、本遺跡の無節の中に撫りに用いた纖維が硬く粗いためか、纖維痕の器面への食い込みが節があるかのように表出された例（第18図23など）があることを付記しておきたい。

第2節 黒浜式の様相について

原畠遺跡では黒浜式に帰属する竪穴住居跡19軒、土坑4基が検出され、良好な資料が得られた。中でもSI001・003・005・008・011・014・015・019出土土器は充実した内容で、相互補完的に型式内容を示していると思われる。ここではこれら遺構出土土器を中心に関構、遺構外出土を併せた主要な資料を第68図1～第70図に抽出し、本遺跡の黒浜式の様相についてまとめておきたい。

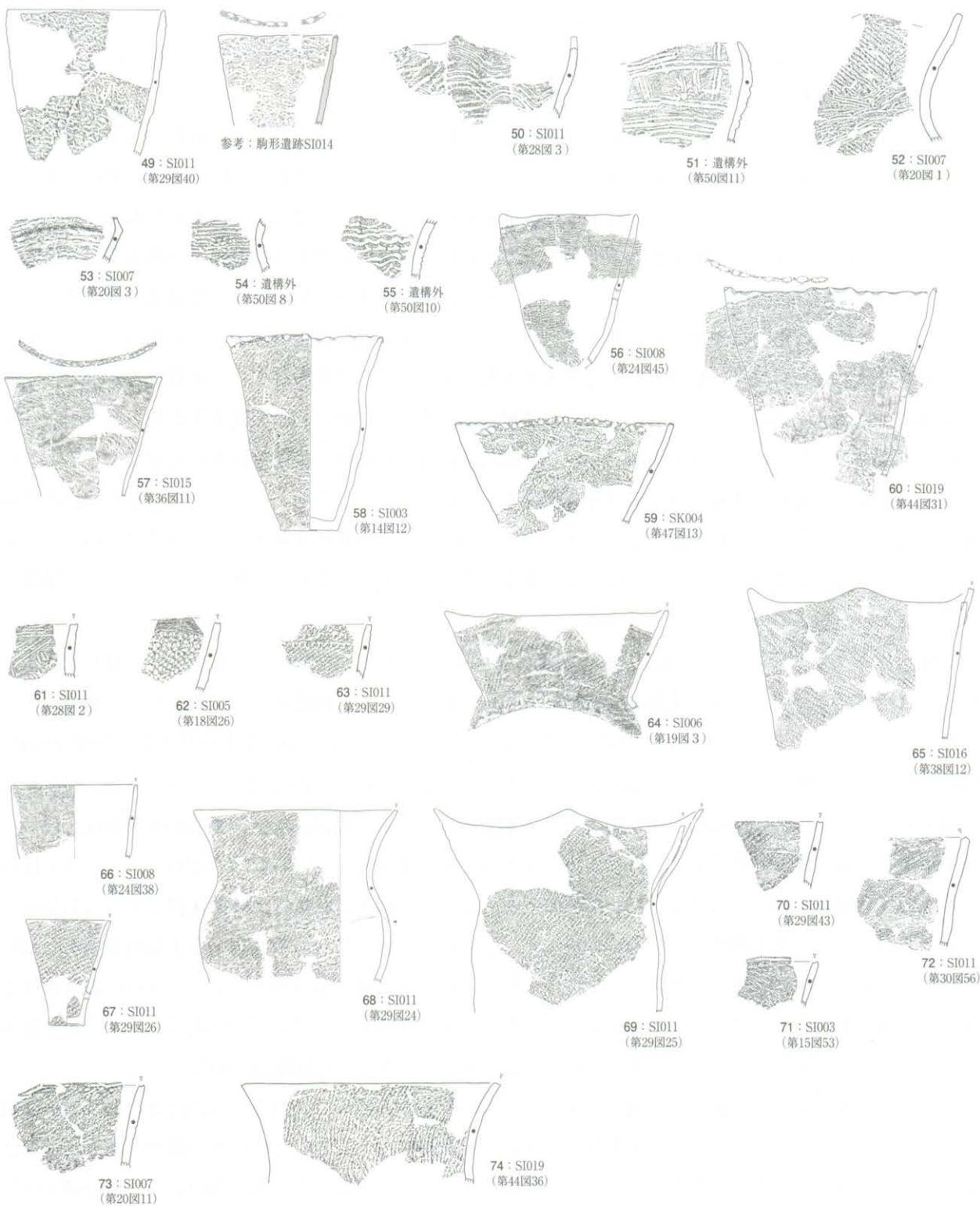
第68図1～8は具備する諸要素から、羽状縄文系土器群の前型式である関山式の遺制が認められるものである。1は口縁端部の刷毛目状沈線（短沈線帯）、半截竹管内側を強めに引いた平行沈線による文様モチーフ、還付末端羽状構成による横帶区画の採用など関山Ⅱ式的要素を種々持つ土器で、平縁と波状縁の差はあるものの、参考資料としてあげた福島県塩喰岩陰例に酷似している。また、胎土中には少量の纖維が含まれる他、長石を主体とした粗砂粒が多量に含まれる。塩喰岩陰例を実見していないが、この胎土は大木2式に特徴的である⁷⁾。2・3は同一個体であるが欠損部があるため、口縁端部の刷毛目状沈線、還付末端羽状構成による横帶区画の採用以外の情報は得られない。4・5は還付末端縄文が施されるもので、4は甕形である。参考資料は隣接する駒形遺跡SI014例で、還付末端施文の好例である。6は前々段合撫（異節）縄文が施されるもので、参考資料はやはり駒形遺跡SI014の好例である。7は注口部の形状が関山



第68図 黒浜式土器 (1)



第69図 黒浜式土器 (2)



第70図 黒浜式土器（3）

式のようなU字形にはならないが、片口注口土器の口縁上部に付く円孔状の注口部である。8は外底面の一部に撫糸文が施されるものである。花積下層式～関山式まで外底面への縄文施文は一定量認められるもので、黒浜式の最も古い部分まで認められる要素と言われている⁸⁾。

第68図9～11は縦位、斜位、やや粗雑な斜格子目の沈線文が施されるもので、黒浜式を代表する有文の一つである。本遺跡ではヘラ状工具などによる一本引き沈線よりも、半裁竹管内側を用いた平行沈線で描出したものが多い。黒浜式も中頃以降になると縦位沈線の獲得によって肋骨文や葉脈文が派生するが、これら沈線文系の土器群はその祖形となるものである。10は追加成形痕の上下で沈線文→縄文の二帯構成になっている。欠損部位があり定かではないが、11も本来、追加成形痕を境にして二帯構成になると思われる。この二帯構成の土器は類例がある程度存在している。二帯構成は縄文→沈線文と逆転はするが、黒浜式の最も古い部分の良好な一括資料である黒浜遺跡群宿上貝塚第3号住居跡例にも複数認められる⁹⁾。

第68図12～15は隆起線が認められるもので、隆起線上に或いは付隨して結節沈線文が施される。12は隆起線で口縁部に狭小な棹状文を形成し、13～15は鍔状隆起線が口縁部と胴部を区画して巡らされる。これらは附加条縄文が大形の菱形構成を取り横位展開すると思われるが、このことは隆起線とりわけ鍔状隆起線文が巡らされる土器の出自系統を考える上で重要である。15では鍔状隆起線文で区画された口縁部には結節沈線による大形菱形文が、胴部には附加条縄文による大形菱形がそれぞれ展開しており、図形構成上の強い繋がりが想定できる。

第68図15～20は結節沈線が口縁部に横位展開するものである。15については既述したとおりである。16・17は直線的な押引文、結節沈線文が密接して横位に施されるが、図形的には大形菱形文を形成しないと思われる。これらと大形菱形文の中間的様相を示すのか定かではないが、参考資料とした駒形SI014例は大形波状文を展開している。18は結節沈線の立ち消えが認められる。19は波状縁の口縁端部に刷毛目状沈線が施され、口縁部には結節沈線による大形菱形文が展開する。胴部には単節縄文が菱形構成を取る。やや不規則で結節沈線の立ち消えと呼べる内容が不明だが、沈線化している箇所も認められる。以上は有尾系土器と有尾系土器の影響を受けた土器群である。特に19は刷毛目状沈線、結節沈線による大形菱形文の展開、胴部単節縄文の整然とした菱形構成など、県内出土資料としては最も有尾系土器の特徴を具備している¹⁰⁾。20は口縁部下端の区画線としてC字爪形による結節沈線が巡らされるよう。区画内の構成は半裁竹管内側を用いた平行沈線文が横位展開し、残存部右上の沈線文（おそらく平行沈線）の向きから鋸歯状文を描出する可能性がある。平行沈線文間には2ヶ所に小粒ながら瘤状貼付文が付される¹¹⁾。

第69図21～31は正撫の無節、単節縄文が施されるものである。器形では21など底径に対し器高のある細身の深鉢がある。また、22のような牽牛花状の器形のものが存在するのもこの時期の特徴である。縄文は成形後、器面の乾燥があまり進んでいない時点で施されているようで、22・27・28のように横位縄文の施文単位変換点に、回転施文に伴いはみ出した粘土帶がミミズ腫れ状に付される。何か意図を持って付されたものか、文様に準ずる可能性がある。新井和之氏によれば、黒浜式の前後型式である関山式、諸磯a式に見られない要素で、黒浜式の変遷の中では氏の言う第IV段階まで存在し、それ以後になくなるようである（新井2010）。また、29・30のように羽状・菱形構成を取る個体がある一方で、第1節で既述したように羽状縄文系土器でありながら、21～23・25・26のように斜縄文となる個体も多い。24は追加成形痕の上下で無節R→軸の縄不明の附加条縄文という二帯構成になっている。31は欠損しているが4単位の板状突起が波頂部に付くと思われる¹²⁾。縄文は追加成形痕を境にして胴部側は羽状構成が明瞭であるが、口縁部

側はランダムな施文方向で羽状構成の意識がない。加えて胴部には羽状縄文に重ねた特異なヘラ書き沈線が認められる。

第69図32～44は附加条縄文が施されるもので、同図45～48は撫糸文が施されるものである。第1節において附加条縄文と撫糸文の判別法とその重量比、附加条種別毎の重量比などについて概述しているので多くは繰り返さないが、正撫縄文に次いで附加条縄文が多用されており、従来の撫糸文が少なからず用いられているという見解は修正が必要と思われる。附加条の施文効果であるが、附加条第1種の32・33、第2種の36・38に見られるように、有尾系土器の大形菱形文にも通じる附加条による菱形構成が展開する。また、附加条第2種では39・40のように軸の縄と附加条の太さを意識して附加条縄文を作成することで、関山Ⅱ式まで多用された直前段合撫（異条）縄文の擬似的効果が得られている。44は附加条第3種で附加条を左巻き、右巻きすることで、48の大木2a式系と思われる網目状撫糸文の擬似的効果が得られている。34は第1種であるが、斜方向に重ねて施文することで網目状撫糸文の擬似的効果が得られている。また、41は軸の縄は不明だが、附加条に異方向の原体を一組にして用い矢羽状の条を表出している。45～47の撫糸文は施文方向に条が一致し、器面を埋め尽くすように施されているが、総じて装飾性に乏しい。なお、48の胎土中には第68図1と同様に長石を主体とした粗砂粒が多量に含まれている。器形では32・35のような細身のキャリパー形の深鉢、39のような甕形に近いものがある他に、36・43のような牽牛花状の器形のものが存在している。

第50図49は原体種別は未明だが、無節の結節回転が横位に連続して施されるもので、参考資料の駒形遺跡SI014例に酷似する。この参考資料の口縁端部上には連続押捺文が施されていることに注目しておきたい。第50図50～55は半裁竹管内側を用いた平行沈線文・コンパス文、櫛歯文など施文具の違いにより複数あるが、基本的に集合沈線文、集合波状沈線文が横位展開する土器である。結節回転の土器は類例に乏しいため可能性の指摘であるが、横位展開する点では集合波状沈線文と施文効果が近似している。第50図56は貝殻条痕文が外面全面に施され、器形は尖底もしくは径の小さい不安定な平底になると思われる稀有な例である。

第50図57～74は口縁端部（口唇部）上が加飾されているものである¹³⁾。57は刻み目が付され、58～60は連続押捺文が施されるもので、61～74は溝状口唇となるものである。これらの口縁部以下の文様を瞥見してみると、通常の縄文、附加条の個体以外に、附加条第3種（60）、関山式の遺制である鋸歯状沈線文（61）、還付末端縄文（62・63）などにも加飾されていることがわかる。

以上の解説から原畠遺跡の黒浜式を整理要約すると、

- ① 関山式の遺制を示す文様構成、文様要素を持つ土器が一定程度含まれている。
- ② 有尾系土器あるいは有尾系の影響を受けた土器が、東関東地域としてはまとまっており、しかも汎関東的には古い段階に位置付けられる可能性がある。
- ③ 附加条縄文が予想以上に用いられている。これは施文効果が関山式から継承されたり、有尾系土器の大形菱形文の図形に合致して発展した可能性がある。
- ④ 口唇部装飾は刻み目の付加、連続押捺文、溝状口唇とも一定程度認められるが、外底面への施文は1点のみの検出であった。

ここまで述べてきた内容から、原畠遺跡の黒浜式土器は概ねより古い部分のまとまった資料であることが理解できたかと思う¹⁴⁾。今回は紙数の関係で実見を行った他遺跡の土器群について、資料化することが

ほとんどできなかった。今後、新資料の蓄積が見込まれる柏北部東遺跡群諸遺跡を含め、重要資料が数多く存在する千葉県北西部の既報告資料について、稿をまとめる機会を持ちたいと考える。

- 註1 前期前半の施文原体については、1974『関山貝塚』における庄野靖寿氏の関山式の縄文原体に係る研究、1986「施文原体の変遷－羽状縄文系土器－花積下層式～関山式土器」による下村克彦氏の総合的研究をはじめ、優れた成果がいくつか認められる。一方、黒浜式は山内清男氏による1979『日本先史土器の縄紋』中で附加条縄文の多い型式として挙げられてはいるが、新井和之氏の一連の研究成果（新井1977他）中に所々見受けられるものの、総合的に論じたものは見られない。
- 2 図版34・35に縄文を中心とした本遺跡出土黒浜式の主な文様の拡大写真を示しておいた。
- 3 羽状縄文の破片は、羽状となる原体が無節、単節、複節いずれの場合もそれぞれの合計重量を二分し、左撲りと右撲りに振り分けて集計した。
- 4 山内清男氏は『日本先史土器の縄紋』の中で「縄紋の統計的研究」を表し、日本先史時代の縄の撲り方の癖を検討しており、一般的には右撲り優勢の型式が多いと言及されている。しかし、ほぼ同時期の地域差や同一地方における時代差の中で、左撲りと右撲りの縄文の比率がいずれかに偏る例があることも指摘されている。例えば、中期後半関東地方の加曾利E式では左撲りが優勢で、同東北地方南部の大木式では右撲りが優勢であるとされる。また、羽状縄文土器群には常に左撲りと右撲りの縄を用意して置く第3の癖（筆者註：左撲り、右撲りに偏るのは、第1、第2の癖ということか）があるとするが、円筒下層式c、dでは羽状構成をとるもの以外は右撲りが多いことである。なお、左撲り・右撲りの撲り方向は1段の縄で決定される。
- 5 これら軸の縄不明とした附加条は網目状には交差していないので第3種になるものは含まないと考えられる。本来は第1種あるいは第2種のいずれかに編入されるものである。
- 6 『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書2－柏市駒形遺跡－縄文時代以降編1』P.39の註1で記載した。
- 7 関山式の遺制が認められる県内出土資料の好例として流山市若葉台遺跡011住居跡1が挙げられる。実見した結果、本例との相違点として刷毛目状沈線の喪失、平行沈線文による鋸歯状モチーフの口縁部での拡大化、地文が還付末端ではないことなどを挙げることができた。なお、この地文は報告では直前段合撲（異条）とされるが、附加条第1種と判定した。
- 8 外底面への施文は、黒浜式を5段階に細分した新井和之氏が第1段階に認められる要素の一つとしたもので、多くは縄文の施文である。原畑遺跡でも分類の際に注意を払ったが、抽出できたのは図示した資料1点のみであった。資料実見に来られた新井氏の指摘もあったので、遗漏がないよう掲載資料を再観察したが追加し得なかった。また、新井氏は底部縄紋の施文後、縄文をナデ消すものが存在することを指摘しているが、本遺跡資料の実見の際、そのことについての言及はなかったので、含まれていないと判断して良いかもしれない。
- 9 蓼田市教育委員会田中和之氏、小宮雪晴氏にお世話になり実見することができた。
- 10 従来、若葉台遺跡002住居跡1は有尾系土器の県内出土資料の好例として挙げられてきた。実見の結果、この土器は口縁端部が狭小な羽状縄文帶となり、口縁部には結節沈線が関山Ⅱ式から繋がるような鋸歯状モチーフを描出している点でやや異質と感じられた。
- 11 鋸歯状文、瘤状貼付文を有す平行沈線文の構成が逆位であること、結節沈線文は用いられていないなど異

- なる点は多いが、黒浜遺跡群宿上貝塚第3号住居跡例が類似している。註9のとおり実見することができた。
- 12 このような突起が付く例が有尾系土器にあることを、資料実見に来られた新井和之氏より伺った。
- 13 新井和之氏が黒浜式第I段階のメルクマールの一つとして、口唇部装飾に言及している（新井2010他）。
- 14 新井和之氏と奥野麦生氏、田中和之氏、小宮雪晴氏の黒浜式細分案の相違については、それぞれの論文を読んで認識はしている。現段階では内容の咀嚼が不十分でコメントできる立場ではないため、第I～V段階や古・中・新段階という区分は用いない。

引用参考文献（著者五十音順）

- 新井和之 1977 「植房貝塚の土器とその周辺」『奈和』15 奈和同人会
1979 「黒浜式土器小考」『日本考古学研究所集報II』 日本考古学研究所
1979 「黒浜式土器研究の問題点」『土曜考古』創刊号 土曜考古学研究会
1982 「5 黒浜式土器」『縄文文化の研究3 縄文土器I』 雄山閣出版
1984 「a 考察 土器について」『佐倉市鏑木諏訪尾余遺跡』 鏑木諏訪尾余遺跡研究会
1985 「黒浜式研究の現状と今後の課題－黒浜式土器は2細分でも良いのか－」『土曜考古』10 土曜考古学研究会
1986 「文様系統論 関山式土器－その成立と終末－」『土曜考古』17 土曜考古学研究会
1986 「関山・黒浜式土器認識に関する一考察－槇の内遺跡IA住居址出土土器を中心とした黒浜式土器
4細分案へのコメント－」『竹籠』創刊号 北総たけべらの会
1988 「黒浜式土器段階分けの発想法」『奈和』26 奈和同人会
1990 「内野式土器・水子式土器及び相互刺突文の再検討」『奈和』28 奈和同人会
1993 「千葉県勝浦市上長者台遺跡出土の黒浜式土器再検討」『縄文時代』4 縄文時代文化研究会
1999 「関東地方 前期（黒浜式）」『縄文時代』10 縄文時代文化研究会
2000 「関東地方周辺における縄文前期中葉の縦区画とコンパス文に関する－考察－黒浜式土器第III段階
の成立と展開－」『奈和』38 奈和同人会
2010 「黒浜式土器第I段階、第II段階口唇部装飾、底部底面施文の再検討」『奈和』47 奈和同人会
我孫子市教育委員会 1976 『我孫子市柴崎遺跡調査報告書〈第三次・第四次〉』
奥野麦生 1989 「黒浜式土器の系統性とその変遷」『土曜考古』13 土曜考古学研究会
上守秀明 2010 「下総台地北西部における縄文前期の遺跡分布と生産活動－基礎データの提示と展望－」『房総の
考古学 史館終刊記念』
小宮雪晴 1996 「黒浜式土器の構成と展開に関する一考察〈黒浜貝塚群出土土器を中心として〉」『埼葛地域文化の
研究 下津弘君・塚越哲也君追悼論文集』
埼葛地区文化財担当者会 1999 『埼葛の縄文前期－埼葛地区縄文時代前期調査報告書－』 埼葛地区文化財担当者会
報告書3
埼玉県教育委員会 1987 『黒浜貝塚群宿上貝塚・御林遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査報告16
(財) 千葉県都市公社 1974 『柏市鴻ノ巣遺跡』
1975 『飯山満東遺跡』
(財) 千葉県教育振興財団 2009 『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書2－柏市駒形遺跡－縄文時代以降編1』

- (財) 千葉県文化財センター 1984「花前Ⅰ・中山新田Ⅱ・中山新田Ⅲ」『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』
1986「谷・上貝塚・若葉台・塚(1)・(2)・馬土手(1)・(2)・(3)」『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅴ』
1989「関宿町飯塚貝塚」『下総利根大橋有料道路建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書』
- (財) 福島県文化センター 1994「塩喰岩陰遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告25』
- 瀧谷昌彦 2001「関東・中部・北陸地方の大木2a式土器の研究 - 土器型式から見た周辺地域との交流 - 」『縄文時代』12 縄文時代文化研究会
- 田中和之 2008「縄文土器 前期」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 谷藤保彦他 1997『第10回縄文セミナー 前期中葉の諸様相』縄文セミナーの会
- 鳥羽政之 1996「関山式から黒山式へ - 古東京湾岸を中心に - 」『埼葛地域文化の研究 下津弘君・塚越哲也君追悼論文集』
- 野田市遺跡調査会 1987『千葉県野田市槇の内遺跡』第IV次発掘調査
- 野田市槇の内遺跡調査会 1981『野田市槇の内遺跡発掘調査報告書』
- 西村正衛 1984『石器時代における利根川下流域の研究 - 貝塚を中心にして - 』早稲田大学出版部
- 蓮田市教育委員会 2005『～黒浜遺跡群～ 宿浦遺跡 宿上遺跡 宿下遺跡 天神前遺跡』
- 原町西貝塚調査団他 1985『原町西貝塚発掘調査報告書』
- 松戸市遺跡調査会 2006『千葉県松戸市八ヶ崎遺跡 - 第1・2地点発掘調査報告書 - 』
- 松戸市役所 1961「中金杉木戸口遺跡・ニッ木溜台遺跡」『松戸市史 上巻』
- 山内清男 1979『日本先史土器の縄紋』先史考古学会